

為替週間展望 = ドル円はもみ合いながら方向感を探る動きか

[12月9日からの1週間の展望]

週間高低 (カッコ内は日)		12月2日～12月6日			
	始値	高値	安値	終値	前週比
ドル・円	149.56	151.23(4)	148.65(3)	149.88	+0.11
ユーロ・ドル	1.0580	1.0589(2)	1.0461(2)	1.0574	-0.0003

国内株・金利/米国株・金利		終値		前週末比	
		終値	前週末比	終値	前週末比
日経平均株価	39,091.17	+883.14	日本10年債利回り	1.058	+0.010
ダウ平均株価	44,765.71	-144.94	米10年債利回り	4.176	+0.008

<来週の主要経済統計等>

- 9日 英12月ライトムーブ住宅価格
日本第3四半期GDP 2次速報、日本10月経常収支
中国11月消費者物価指数、中国11月生産者物価指数
- 10日 中国11月貿易収支
豪中銀(RBA)政策金利
独11月消費者物価指数確報値
米第3四半期非農業部門労働生産性指数確報値
- 11日 米11月消費者物価指数
カナダ銀行(BOC)政策金利
- 12日 豪11月雇用統計
英10月鉱工業生産指数、英10月製造業生産指数、英10月貿易収支
スイス銀行(SNB)政策金利
欧州中央銀行(ECB)政策金利
ラガルドECB総裁記者会見
米11月生産者物価指数、米新規失業保険申請件数
- 13日 日銀短観(12月調査)
日本10月鉱工業生産指数確報値
ユーロ圏10月鉱工業生産指数
カナダ10月製造業出荷、カナダ10月卸売売上高
米11月輸入価格指数

【前回のレビュー】為替市場はトランプ氏の発言に振り回される可能性はあるものの、米国経済の堅調さは維持されてドルは下支えされるとみられる。一方で、日銀会合での利上げ観測の高まりから、円買いの動きは強まりそう。こうした中、ドル円はやや上値の重い展開になるとした。

【ドル円は売り一巡後はレンジ相場】

11月29日に発表された11月の東京都区部消費者物価指数(生鮮食品を除く)は前年比+2.2%となり、市場予想の+2.1%を上回った。これを受けて12月の日銀金融政策決定会合での利上げ観測が高まり、ドル円やクロス円で円買いが進行した。ドル円は149円台半ばまで円高が進んだ。

12月2日の週は週の前半にもみ合いながらドル安円高が進んで、円高が一服した後には下げ渋りを見せる展開となった。

2日は前週末の大幅安の反動から150円台後半まで戻りを見せた。戻りが一服した後には下げに転じている。フランスの政局不安でユーロ円が下落すると、ドル円も149

円近辺まで下落した。3日は150円台前半まで戻した後は再び下げに転じた。韓国で大統領が非常戒厳を宣布すると、リスク回避の円高となり、148.60台まで円高が進行した。その後、米10月雇用動態調査（JOLTS）求人件数が市場予想を上回る伸びを見せると、ドル高円安に傾いて、149円台後半まで戻した。

4日には「日銀が年内の会合で利上げを見送る」との報道を受けてドル買い円売りの動きとなり151円台前半まで上昇した。その後、11月の米ADP雇用報告や11月の米ISM非製造業景況指数が市場予想を下回ったことで、ドル円は150円近辺まで下落した。その後、米連邦準備制度理事会（FRB）のパウエル議長が利下げを急ぐ必要がないとの認識を示したことで、ドルは強含みで推移した。

5日午前中に中村日銀審議委員が「まだ賃上げの持続性に自信を持っていない」などと発言すると、日銀の追加利上げ観測が後退して円が売られる場面があった。午後は、中村日銀審議委員が「利上げに反対しているわけではない」と発言すると円買いが入り、150円台を割り込み、一時149.60台まで下値を広げた。売り一巡後は150円台を回復している。

【12月FOMCでの利下げ観測が高まる】

CME FEDウォッチによると、12月の米連邦公開市場委員会（FOMC）での0.25%の利下げ確率は70%前後となり、据え置き確率は30%前後となっている。米経済指標がまちまちの結果を示す中、利下げ観測が徐々に高まっているようだ。

日米の経済指標やイベントとしては、9日に日本第3四半期GDP2次速報、日本10月経常収支、10日に米第3四半期非農業部門労働生産性指数確報値、11日に米11月消費者物価指数、12日に米11月生産者物価指数、米新規失業保険申請件数、13日に日銀短観（12月調査）、日本10月鉱工業生産指数確報値、米11月輸入価格指数などがある。

米国のインフレは落ち着きつつあるものの、米11月消費者物価指数が注目される。事前予想では、総合は前月比+0.2%（前回も+0.2%）、前年比+2.7%（前回+2.6%）で、コアは前月比+0.3%（前回+0.3%）、前年比+3.3%（前回+3.3%）となっている。総合の前年比が前回から上振れの見通しながら、他はいずれも前回から横ばいの見通し。おおむね想定範囲内なら影響は限定的か。予想から下振れるようだと12月の米連邦公開市場委員会（FOMC）で利下げ観測が高まりそうだ。

12月のFOMCでの利下げ観測が高まっている。一方で、12月の日銀金融政策決定会合では利上げ観測はやや後退している。こうした中、ドル円は148円台まで下落した後に151円台まで戻りを見せるなど、一進一退の動きとなっている。日米の金融政策への思惑が交錯する中、150円を挟んでもみ合いながら方向感を探る動きとなりそうだ。ドル円の目先の予想レンジは、147.00～153.00円。

【ユーロドルはレンジ相場で推移か】

12日の欧州中央銀行（ECB）理事会では0.25%の利下げが見込まれている。当局者の間では大幅利下げに関しては警戒感を示す向きもあり、0.25%の利下げに落ち着きそうだ。ラガルド総裁が来年1月以降の利下げに関してどのような見解を示すかが注目される。

ユーロドルは1.0500ドルの節目を割り込んだ後は同節目を回復するなど、もみ合いの動きが継続している。4日はラガルドECB総裁が欧州議会で証言を行い、「中期見通しは下振れリスクに支配されている」と述べ、景気の先行き不安に言及した。また、フランスでのバルニエ内閣の崩壊など政治不安もあり、上値を追いくいとみられる。12日のECB理事会での利下げはおおむね織り込まれているとみられ、安値圏でのレンジ相場が続くこととなりそうだ。ユーロドルの目先の予想レンジは、1.0400～1.0700ドル。

4日にベイリー英中銀総裁は「経済見通しが裏付けられれば、来年4回の利下げを想定」「英中銀の最新の金融政策報告で示された中央値予測によれば、漸進的な利下げを目指すことが示唆されている」と述べた。なお、市場の見通しでは、英金融政策委員会

(MPC)では年内の利下げはないとみられている。

ポンドドルは5日移動平均線をサポートにして、戻り歩調で推移しており、21日移動平均線を回復している。堅調な地合いが続いて、戻り歩調が継続するとみられる。ポンドドルの目先の予想レンジは、1.2600～1.2900ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、9日に英12月ライトムーブ住宅価格、中国11月消費者物価指数、中国11月生産者物価指数、10日に中国11月貿易収支、豪中銀(RBA)政策金利、独11月消費者物価指数確報値、11日にカナダ銀行(BOC)政策金利、12日に豪11月雇用統計、英10月鉱工業生産指数、英10月製造業生産指数、英10月貿易収支、スイス銀行(SNB)政策金利、欧州中央銀行(ECB)政策金利、ラガルドECB総裁記者会見、13日にユーロ圏10月鉱工業生産指数、カナダ10月製造業出荷、カナダ10月卸売売上高などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブソリューションサービスは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブソリューションサービスが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブソリューションサービス)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。